The Pacific Society

捕鯨を通じてのアメリカの東アジア・太平洋関係の展開
－１９世紀半ばの米布関係を中心に－

都築博子

はじめに

19 世紀のアメリカは、経済的にも領土的にも大西洋から太平洋へと拡張しつづけていたのであるが、捕鯨船の活動も、アメリカからアジア太平洋と展開していくひとつの現象だった。当時、商業捕鯨は最盛期を迎えていたので、アメリカ捕鯨船の活動は、鯨製品の需要が高まるにつれて、地理的、経済的に広範囲に及ぶようになる[1]。1819 年に「ジャパン・グラウンド」[2]と呼ばれた日本から東南の太平洋地域にマッコウクジラの大群が発見されると、これまでの大西洋から太平洋が主な漁場となった。

捕鯨船が寄港する島や都市は、海難事故にあった船員達の救いの場所であり、船上で苛酷な仕事をする船員達の体を癒す楽園であった。そのため座礁や難破して途方にくれる船員や、歓楽や賭博などの生活に入り浸り、堕落していく船員も多数存在した。また反対に、現地の人から不当な扱いを受けたり、他国の捕鯨船員等と問題を起したりすることもあった。こうした捕鯨船船員などのアメリカ国外における海員の救済、紛争の解決やアメリカの商業利益の追求（市場開拓）のために「領事」が派遣されたのであった[3]。

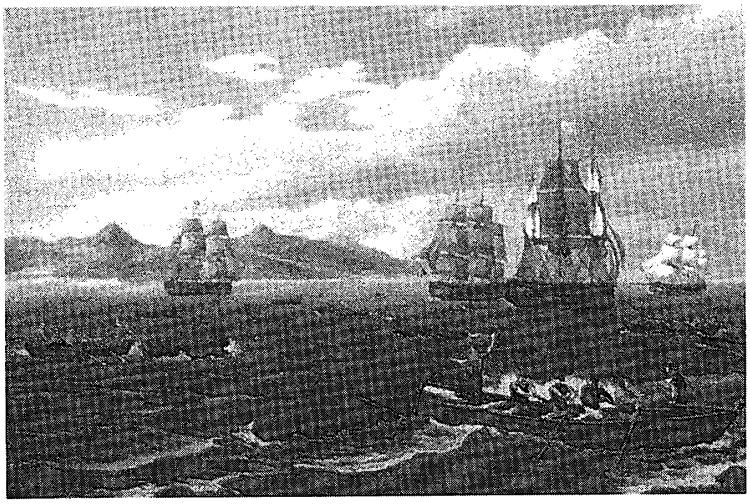
太平洋に位置するハワイ諸島は、1820 年頃からから 1860 年まで太平洋の最大の捕鯨基地として栄えた。ジャパン・グラウンド発見の影響で日本近海にも多くの捕鯨船が航行していたのであるが、海禁政策をとっていた日本は他国に開港していない。そこで、ジャパン・グラウンドの東南に位置し、当時どの国からも植民地化していないハワイ諸島が捕鯨船の寄港地として好まれたのだった[4]。

捕鯨産業が最盛期を迎えるにつれて、ハワイに寄港する捕鯨船も増え続けた。特にアメリカの捕鯨船数は他国の船数よりも多かった。そのため早くも 1820 年にアメリカは、ハワイに「領事」と同じような権限をもった「代理人」を派遣した。

ハワイに滞在するアメリカ人が増加しつづけると、その保護のために、1826 年にアメリカとハワイ王国との間で、「取り決め」がなされた。これは、ハワイ王国が外国との間で結んだ最初の公式文書である。また 1849 年には、アメリカはハワイと友好通商航海条約を結んでいる。このようにしてアメリカは、捕鯨船の活動を通じてハワイ王国との外交的結び付きを強めていった。

本稿では、捕鯨船の東アジア・太平洋への展開とそれに伴うアメリカ領事の動向を踏まえつつ、当時、東アジア・太平洋最大の捕鯨基地であったハワイ王国の捕鯨最盛期を分析する[5]。この観点から次のことが分かる。１）アメリカの捕鯨産業の展開していくにつれてアメリカの領事館もヨーロッパ、西インド諸島などの大西洋に面した場所から東アジア・太平洋地域に設置されるようになった。２）ハワイ諸島に外国船が頻繁に寄港し、ハワイが太平洋の重要な国際捕鯨基地となっていた。３）アメリカ捕鯨が太平洋へ展開していく中で、アメリカは、ハワイ王国に領事と同様な権限を持つ「代理人」[6]を派遣し、また、条約を交わして、両国の関係を密接にしていった。以上の３点である。

Rotch fleet among school of sperm whales



1833 年に描かれたハワイ諸島近海の捕鯨の様子

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

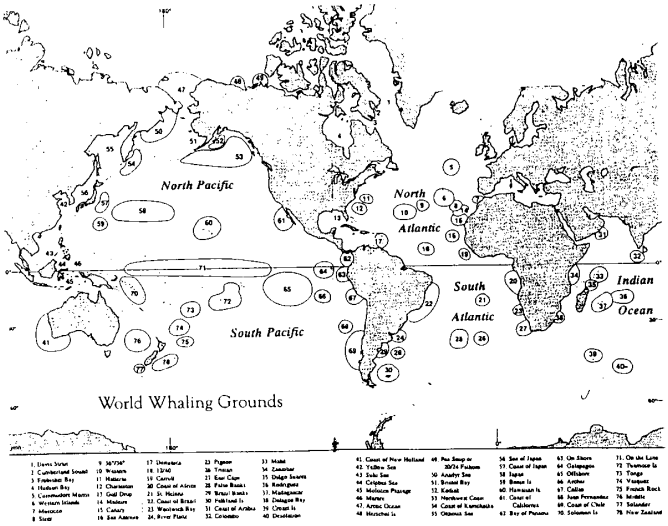
I　アメリカの東アジア・太平洋への展開

1　アメリカ捕鯨船の東アジア・太平洋への進出

ヨーロッパにおけるナポレオン戦争が終結するとアメリカは自国の経済発展に専念できるようになり、「マニフェスト・デスティニイ」[7]が叫ばれるような時代になっていた。国内的にも対外的にも拡張機運が高まった。そのためアメリカの対外関係に関わる費用も年々増加している[8]。

アメリカの捕鯨産業の発展も例外でなく、米英戦争後数年の間にアメリカ捕鯨船が頻繁に世界中を航行するようになっていた[9]。19 世紀の捕鯨に関する地図をみるとよくわかる。1887 年ハワード・クラークによって作成された世界地図は、鯨の種類別による 19 世紀の捕鯨漁場を表している。これには、当時の捕鯨場とそれ以前の旧捕鯨場であった場所が網羅されている[10]。また、（図１）のブッシュの地図は、具体的な捕鯨の場所が描かれている[11]。

（図１）世界の捕鯨場

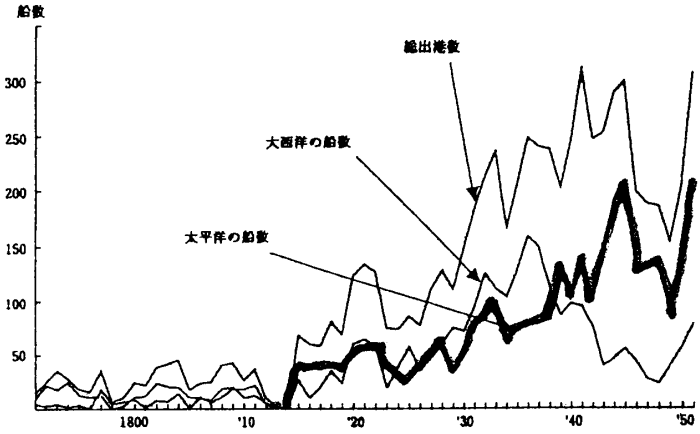


Briton Cooper Busch, *Whaling Will Never Do for Me: The American Whaleman in the Nineteenth Century,* (Kentucky: The Univ. of Kentucky, 1994)

これらの地図から捕鯨船の活動地域がほぼ全海域に及んでいたことを物語っている。漁場は世界の海に広がっていた。

（グラフ１）は、捕鯨船の総出港数、および太平洋と大西洋への出港数である。

（グラフ１）太平洋と大西洋へのアメリカ船船数比較（出港数）



森田義昭『鯨と捕鯨の文化史』
（名古屋大学出版会　1994 年）94 頁

その中の太平洋と大西洋の船数(出港数)を比較すると、1839 年を境として大西洋にむかう船よりも太平洋にむかう船の出港数が大幅に増えている。1830 年代までの捕鯨船は、大西洋に向けて出港することが多かった。しかし、1839 年になると太平洋への出港数は 130 隻、大西洋へは 85 隻となり、初めて太平洋へ向かう船数が大西洋へ向かう船数を上回った。このグラフから 1830 年頃から捕鯨船数も増大していることが分かる。

このように捕鯨船数が増加し、大西洋から太平洋へと捕鯨場所が替わっていったのは、大西洋における鯨の数が減少したことも一理ある。しかし、最大の要因は、1819 年にジャパン・グラウンド海域内でマッコウクジラの大群が発見されたことに起因する。ジャパン・グラウンドとは日本近海の太平洋ではなく、さらにその先の太平洋を意味するもので、ハワイ諸島までの広い範囲を示す。この発見後、この海域でクジラを捕獲する船が年々増加し、捕鯨船が太平洋へむかうジャパン・グラウンドブームがおこった。このことは、捕鯨業が太平洋時代を迎えたことでもあった。

2　東アジア・太平洋における領事館の設置

ジャパン・グラウンドだけでなく、ハワイから北の海域で新しい捕鯨場が次々と発見された。例えば、オホーツク海や、ベーリング海峡、北極近くである。これらの発見により太平洋の各地が捕鯨漁場となった（図１参照）。前述のように 1820 年以降に徐々に太平洋へ向かう船が多くなり、

NII-Electronic Library Service

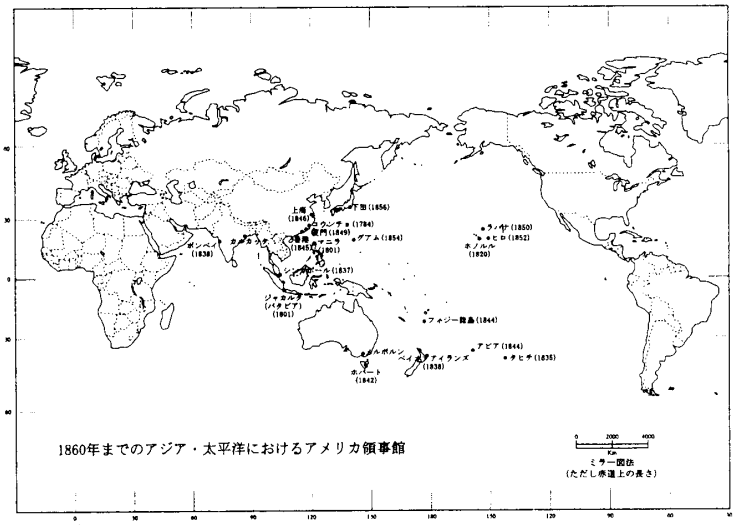
The Pacific Society

1840 年になると大西洋を漁場にする船よりも太平洋を漁場にする船が多くなった。こうした捕鯨船は薪水補給地として東アジア・太平洋の島々に寄港したのであった。

航海には多くの危険が待ち受けていた。例えば、台風やしけ、不十分な海図による事故、座礁、海賊、船内での暴動、病気などである。また寄港地においても、捕鯨員がトラブルに巻き込まれることや、トラブルを起すこともあった[12]。また困窮した船員が寄港地の人から人道的でない扱いを受けることもあった。こうした捕鯨船員達の救助や船員の生命・財産の保護や商業利益の追求（市場開拓）のために東アジア・太平洋にアメリカ領事館が設置されていった[13]。

(図2)は 1854 年までにアジア・太平洋に設置された領事館と開設年である[14]。

（図2） 1800 年から 1860 年までの東アジア・太平洋におけるアメリカ領事館

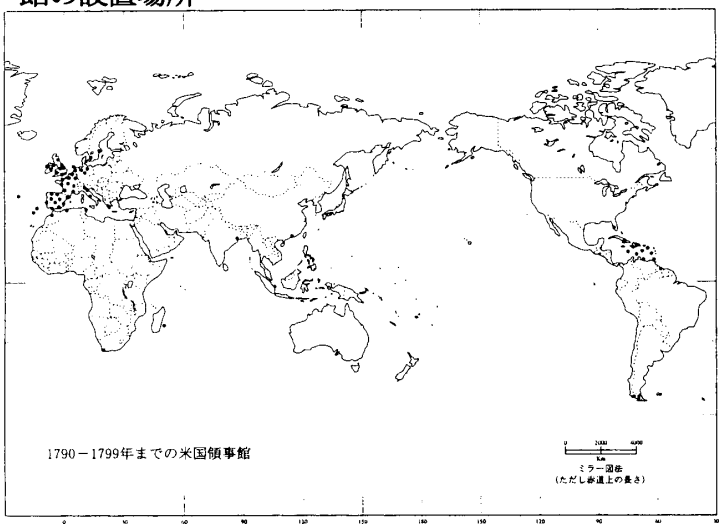


Charles Stuart Kennedy, *The American Consul: A History of the United States Consular Service,1776-1914,* (Westport: Greenwood Press,1990) P104 より作成

年代順に記述すると、バタヴィア（旧ジャカルタ）（1801 年）、オランダ領東インド（1801 年）、マニラ（ 1801 年）、ホノルル(1820 年)、タヒチ(1835 年)、 ベイ・オブ・アイランド（アイランズ湾）（ニュージーランド）（1838 年）、ホバート(1842 年)、アピア（サモア）（1844 年）、 ラウルハラ（フィジー諸島）(1844 年)、 香港（1845 年）、上海（1846 年）、厦門（1849 年）、ラハイナ（ハワイ諸島）（1850 年）、 ヒロ（ハワイ諸島）（1852 年）、メルボルン(1852 年)、グアム(1854 年)、下田（1856 年）である[15]。

（図３）[16]と比較すると一目瞭然であるが、19 世紀のアメリカは、アメリカの捕鯨産業の発展にともない、大西洋から太平洋へと展開していたのであった[17]。

（図３）1790 年から 1799 年までのアメリカ領事館の設置場所



Charles Stuart Kennedy, *The American Consul: A History of the United States Consular Service,1776-1914,* (Westport: Greenwood Press,1990) P20 より作成

Ⅱ ハワイ諸島の発見とアメリカ捕鯨船の到来

１クックのハワイ諸島発見と外国船の到来

アメリカが大西洋から太平洋に展開していく中で、太平洋の重要な拠点になったのが、ハワイ諸島であった。ハワイ諸島は、北緯 18° 55’ から、西経 154° 48’ から 178° 25’ 間の北太平洋の中心に位置し、東部の 8 つの島と 124 島からなる。面積は、16,621.6 平方キロメートルである[18]。

ハワイ諸島に最初に定住したのは、５世紀頃に一隻のカヌーに乗るぐらいの小グループでやってきたポリネシア人（Polynesians）であった。その後、1100 年から 1250 年頃になると、新しい定住者が、マルケサス諸島(the Marquesas)、タヒチ（Tahiti)、サモア(Samoa)からやってきた。1250 年頃から 1778 年の間は、新しい移住者もなくハワイ諸島は、太平洋の中で孤立していた[19]。そして有力首長が各地で部族集団を統率するようになった[20]。

1778 年に、イギリスの冒険家ジェームズ・クック船長[21]が、偶然にアメリカ大陸に向かう途中で

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

オアフ島を発見し、その2日後にカウアイ島に上陸した[22]。この発見により、欧米諸国がハワイ諸島を知ることになった[23]。

1778年から1794年までには、イギリス人、アメリカ人、スペイン人が来航し、特にイギリス人が多かった[24]。外国船が頻繁に来航する中、1795年、カメハメハ大王（1世）がイギリスの援助を得て、ハワイ諸島の大部分を統一し、ハワイ王国が誕生した[25]。

徐々にハワイ諸島は、欧米諸国にとって太平洋の重要な基地となっていった。欧米諸国がハワイに接触し始めた当初の目的は、通商のためであった。ハワイの交易品白檀[26]を取引することであった[27]。また、北アメリカ太平洋岸のラッコの皮を中国市場へ運搬するためでもあった。イギリス、アメリカ、ロシアの商船がハワイを補給地にした。更に当時、イギリス、フランス、スペインは植民地獲得に向けて太平洋に進出してきた[28]。ハワイは、そうした領土拡大を目指すヨーロッパの船の補給地にもなっていた。

2　増加するアメリカ捕鯨船

ジャパン・グラウンドが発見されると捕鯨船の基地としても重要な役割を果すようになった。当時どの国からも植民地化されていない開港しているハワイ王国は、捕鯨船の寄港地として好まれたのであった。

以下の（表1）は、1844年から1858年までにハワイ諸島に寄港した捕鯨船数である。年によっては500隻を越える捕鯨船がハワイ諸島に寄港したのであった[29]。

（表1）1844年から1858年の捕鯨船数

年	捕鯨船数	備考
1844	165	ホノルルのみ
1845	590	ホノルル、ラハイナ、ヒロのみ
1846	596	ホノルル、ラハイナのみ
1847	167	ホノルルのみ
1848	148	ホノルルのみ
1849	262	ホノルル、ラハイナのみ
1850	237	ホノルル、ラハイナのみ
1851	135	捕鯨船が一つもしくはそれ以上の港に一回もしくはそれ以上寄港していようとなかろうと実際の数
1852	519	
1853	535	
1854	525	
1855	468	
1856	366	
1857	387	
1858	526	

THE POLYNESIAN[30], Saturday January 29,1859より作成

ハワイはこのように多くの捕鯨船が寄港しているが、中でもアメリカの捕鯨船が一番多く来航していた。次に多いのは、イギリス、フランス、ブレーメン[31]の順である（表2参照）。

（表2）1824年から1843年までの捕鯨船のホノルル寄港数

船数	1824	1825	1826	1827	1828	1829	1830	1831	1832	1833	1834	1835	1836	1837	1838	1839	1840	1841	1842	1843
American	68	22	91	64	84	83	75	60	101	89	93	63	57	50	62	58	41	53	53	109
British	18	11	16	18	28	26	19	21	17	18	18	19	16	17	11	2	4	6	14	7
Copenhagen																			2	
French						2									3		2	1	5	14

THE FRIEND, May, 1844 p49より作成

また、以下の（表3）の統計は、ハワイ捕鯨産業の最盛期中の1844年1月1日から10月10日までのハワイにおける捕鯨船数と船員数を示している。この統計もハワイでアメリカが他国よりも圧倒的な数を誇っていることを示している[32]。ニューブランズウイックなどはアメリカ人によって指揮される場合が多かったからアメリカがハワイの捕鯨産業において指導権を握っていたと言えよう。

（表3）主要各国の船数と船員数

国　名	船数（隻）	船員数（人）
アメリカ	410	13,200
フランス	26	780
ブレーメン	19	570
イギリス	5	150
ニューブランズウイック	4	120
デンマーク	2	60
ノルウェー	1	25

Golda Pauline Moore, *Hawaii during the Whaling Era:1820-1860*(Honolulu: M.A. Thesis, the University of Hawaii, 1934) p.28より作成。

Ⅲ　ハワイ捕鯨貿易とアメリカとの外交関係の展開

1　ハワイ捕鯨貿易とアメリカ

ハワイ諸島における一番の交易品白檀が、底を尽きると、鯨産品[33]が交易品となった[34]。また、太平洋に鯨を求めて欧米の捕鯨船が増えていた理由

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

の一つは、欧米で産業革命がおこり、機械化が進んだためであった。当時文明の資源（鯨から作られた製品）は、様々な分野で人々の暮らしを豊かにした。例えば、鯨文化の代表的産物である鯨油は、ランプの油や蝋燭などの光源として利用された。また激増する繊維工業で羊毛や綿布の洗剤として使用された。ペンキの原料としても利用された。鯨鬚は、当時流行したコルセットや、杖、櫛、鞭、傘、櫛、ブラシなどになった。人々の生活が豊かになってくると捕鯨製品の需要がさらに高まった[35]。また、鯨社会における独自の文化も形成された。代表的産物といえば、スクリウムショウ（細工彫刻）である。

これらの需要に伴い1820年から1860年のハワイ諸島の貿易額は、年々増加している[36]。1843年の輸入額は、223,383.88ドルであったが1858年になると、189,660.60ドルとなり約5倍増加している。輸出においては、1844年は、169,641.90ドルであったのが、1858年には、787,082.08ドルと輸入同様、約5倍増加している。

こうしたハワイ諸島における貿易が増加していく中で、重要な位置を占めていたのが捕鯨船との取引である。以下の（表4）は、1846年におけるホノルル港でのハワイ生産物の輸出の内訳と取引金額である。

（表4）1846年のホノルル港での輸出の内訳と金額

Exports from the Port of Honolulu, Oahu, Hawaiian Islands, for the year ending Dec. 31st, 1846.	
Foreign goods claiming drawback,	$62,325 74
Do " not claiming drawback, (estimated)	81,100 00
Hawaiian Produce.	
300,000 lbs. sugar,	16,500 00
16,000 gallons molasses,	4,000 00
8,500 bbls. salt,	10,625 00
10,000 lbs. coffee,	1,500 00
10,000 lbs. arrow root,	1,400 00
35,000 goat skins,	7,000 00
2,000 bullock hides,	4,000 00
Mustard seed,	500 00
Brooms, mats, tappas, &c., &c.,	2,000 00
Supplies—salt and fresh beef, vegetables, &c., for seventeen ships of war, at $4000 each,	68,000 00
Supplies for thirty-eight merchant vessels, at $1000 each,	38,000 00
Supplies for one hundred and twelve whale ships, at $400 each,	448,000 00
Add for whale ships touching outside, not included in the above,	20,000 00
	$763,950 74

The Friend, January 15, 1847

この統計からホノルル港での輸出の取引額が判るのであるが、捕鯨船への供給品の金額は、468,000ドルである。全体の61%を占めている。

次の（表5）は、ハワイ諸島の輸入に関するものだけであるが、アメリカが貿易において重要な位置を示している。下記が示すようにアメリカが最も多く、325,630ドルである。全体の54%を占めている。当時カリフォルニアは、まだアメリカの州入りを果していなかった。またコロンビア・リバーは、現在のアメリカの一部にあたる[37]。この金額もアメリカとの取引に入れるのであれば、アメリカが占める割合は、全体の61%になる。

（表5）ホノルル港における諸外国との輸入金額

Imports as per table, say $598,382 24, imported directly from the following countries, viz.:	
United States,	$325,630 00
England,	116,929 00
China,	43,040 00
Valparaiso,	38,965 00
Columbia River,	23,101 00
California,	17,040 00
Hamburg,	4,474 00
Bremen,	4,069 00
Sidney,	1,870 00
Kamschatka,	1,087 00
Other countries, including oil, bone, &c., landed from whaleships,	22,186 00
	$598,382 00

The Friend, January 15, 1847

ハワイにおいて捕鯨産業の拡大は、上記で示したように貿易等から経済発展がもたらされた。ハワイ諸島を訪れたサミュエル・クレーメン（マーク・トゥエイン）[38]は、『ハワイからの手紙』の中で1840年代頃にハワイに訪れた捕鯨船員達がお金を惜しみなくハワイで使用したことを述べている[39]。

経済の発展や近代化が進みハワイに活気がもたらされる、一方で、捕鯨はハワイ社会に多くの問題をもたらした。例えば、捕鯨船からの脱船者による浮浪者の拡大、船員によるよっぱらいや暴動などである[40]。また捕鯨船員たちなどの流入は、ハワイ先住民の激減をもたらした。捕鯨における苛酷な労働から逃亡する者達が、ハワイに定住することもあり、その穴埋めにハワイ人が多く捕鯨船員になった[41]。そしてハワイは、多くの人種から成り立つようになった[42]。ハワイ独自の文化が消え始めた。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

2　1826年の米布間の「取り決め」

このように捕鯨船の到来は、ハワイに多くの社会問題をもたらした。特に漂流民と並んで捕鯨船からの逃亡者は大きな問題になっていた。1820年にアメリカのモンロー大統領は、アメリカ人の救助や生命・財産の保護のために、ジョン・コフィン・ジョーンズ[43]を、「合衆国の通商及び海運業者の代理人（Agent of the United States for Commerce and Seamen）」という名目でハワイに派遣した。この代理人は、領事[44]と同じような権限をもっていた[45]。

代理人が派遣された後も、捕鯨船員は、捕鯨船やハワイ王国に対して抗議をすることもあった。これに対して捕鯨船の持ち主は、米国政府に軍艦を派遣するように訴えたのであった[46]。

当時、海軍省は、南米戦争が終焉したため太平洋に関心を寄せるようになっていた。そこで、ハワイへ軍艦を派遣するために、当初は、太平洋艦隊指揮官であるハル提督（Captain Hull）が命令された。しかし、アメリカ沿岸の警備のために彼が行くことができなかった。そこで、1826年、パーシーバル中尉（Lieutenant Percival）の指揮のもとでアメリカ軍艦ドルフィン号（Dolphin）がハワイに来航し3ヶ月間滞在した。その間に脱走船員や捕鯨船員を取り締まった。その後、今度はピーコック号(Sloop-of-War Peacock)がドルフィン号同様に3ヶ月間停泊した。

ピーコックの船長トマス・ジョーンズ(Thomas Jones）は、この時はじめてアメリカ合衆国の代表としてハワイ王国と「取り決め」[47]を交わした。この「取り決め」は、第1条から第8条からなり、両国の永遠の平和と友好関係を誓っている。通商に関しては、アメリカの船舶と船員と積載物などの保護やハワイの人々との自由貿易を謳っている。また難破した船の保護やアメリカ商人の法的権利も認めた。さらに第7条では、アメリカ船の逃亡者の逮捕や引渡しについても規定している。

この「取り決め」はハワイ王国にとって外国政府と交わした始めての公的文書である。その内容は、通商と捕鯨、船員に関するのものが主であり、捕鯨を中心にしてアメリカとハワイ王国の外交関係の礎が据えられたことがわかる。ハワイ王国は、アメリカとの関係においてその後も「取り決め」を守りつづけたのであった。

おわりに

19世紀のアメリカは、アメリカの捕鯨産業の発展にともない、大西洋から太平洋へと展開していく時期であった。当時、商業捕鯨は最盛期を迎えていたので、捕鯨船は、鯨を求めて世界中の海へ航行していた。そのため自国の海員の救済や、紛争の解決や自国の商業利益の追求（市場開拓）を担った領事がアメリカ船の寄港する場所で必要であった。

1846年になるとアメリカは、イギリスから現在のオレゴン州とワシントン州の一帯を得ることができた。また1846年に起ったメキシコ戦争の結果、カリフォルニアを獲得することができた。これによりアメリカとハワイの距離が縮小した。船の日数にすると130日以上も距離が短くなったのである[48]。そのため太平洋及びアジアとの貿易が今まで以上に注目されるようになった。また当時は、マニフェスト・デスティニイの時代であり、太平洋に関する関心が高まった時期であった。さらにカリフォルニアの金山発見によりゴールドラッシュが起り、その西の太平洋に存在するハワイ諸島を領有しようとする機運も出はじめたのであった[49]。

こうした中、1849年にアメリカとハワイ王国の間で正式な米布友好通商航海条約[50]が締結された。以前の条約よりも体系的にまとまっており全17条から成り立っている。この条約は、通商に重点があるものの第7条では、捕鯨船のヒロなど三港へのアクセス、第10条で捕鯨船からの逃亡者の取り締まり、第11条で漂流民の保護を扱うなど、1826年の「取り決め」との連続性を示している。

こうしてアメリカは、他国よりも早くハワイ王国との関係を強めて、ハワイ諸島を東アジア・太平洋の拠点として東アジア・太平洋地域に展開していった。

注

1　捕鯨産業に関する研究書は多数存在するが、アメリカ捕鯨史のみならず海事史を研究する際にどの研究者も言及するものとしてAlexander Starbuck, *History of the American Whale Fishery,* (New York: Castle, 1989)がある。

2　「ジャパン・グラウンド」は、日本の近海の太平洋を指すのではなく、さらにその先の太平洋を指すものであり、日本の海からハワイ諸島の間の広い範囲を指す。「ジャパン・グラウンド」を示

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

す参照本として、例えば、Briton Cooper Busch, *Whaling Will Never Do for Me: The American Whaleman in the Nineteenth Century,* (Kentucky: The Univ. of Kentucky, 1994).

3 当時、アメリカの領事館は他の在外公館よりも多くの対外活動を行っていた。本国に連絡をとるための交通・通信手段が未発達であったため、連絡に歳月を要していた。そのため、領事は問題の裁量をまかされていた。

4 1889年8月に米国は、ハワイ諸島を併合した際に、「テリトリー・オブ・ハワイ（Territory of Hawaii）」とハワイ諸島を命名した。これから「ハワイ」という名前が、一般に使用されるようになったのである。それ以前のハワイ諸島は、イギリスの船長ジェームズ・クックが名づけた「サンドウィッチ諸島」という名前で一般に呼ばれていた。クック船長は、彼の後援者であったジョン・マンタグ（John Mantagu, Earl of Sandwich and First Lord of the Admiralty）に敬意を称して「サンドウィッチ」の名前を付けたのであった。

5 ハワイの捕鯨産業について参照した論文、文献は例えば以下のものがある。
Dorsett, Edward Lee. "Hawaiian Whaling Days." *The American Neptune,* v.14, no.1, Jan.1954. Pp42-46; Kuykendall, Ralph S. *A History of Hawaii.* (New York: The Macmillan Company, 1928) pp.189-197. ;Mullins, Joseph G. *Hawaiian Journey.* (Honolulu: Mutual Publishing Company, 1978) p38; Potter, Norris W. and Kasdon Lawrence M. *HAWAII: Our Island State.* (Honolulu: The Bess Press Inc.) pp.104-108.; Purcell H.G. Hawaii and the Whaling Fleet. *Nautical research journal,* v.7, no.1/2, Jan. /Feb., 1955.pp3-6. ; Simpson, Mackinnon. "Hawaii's Whaling Heyday." *Aloha Airline & Island Air* Volume 23. No6. pp26-29.; Simpson Mackinnon, *Whale song: a pictorial History of Whaling and Hawaii,* (Honolulu: Beyond Words Publishing Co., 1986.; Wong, Helen H. and Carey, Robert K. *Hawaii's Royal History.* (Hawaii: Hogarth Press-Hawaii, Inc, 1980) pp. 149-151.

6 正式名は、通商と船員のためのアメリカ合衆国の代理人＝エージェント（Agent of the United States for Commerce and Seamen）である。

7 「明白なる天命」である。 国内の西方への領土拡張 さらにその先の海外への膨張、西への拡大を正当化したもの。この考えは日本を開国させたペリー来航の背景にもなっている。

8 宇佐美前掲書 174頁。

9 捕鯨船は、様々な役割を担っていた。例えば、輸送船、郵便船、移民船、奴隷船、軍船、交易船などである。森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』（名古屋大学出版会 1994年）26－32頁参照。

10 Lance E Davis, Robert E Gallman and Glter Karin, *In Pursuit of Leviathan: Technology, Institutions, Productivity, and Profits in American Whaling 1816-1906,* (Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1997) PP26, 27

11 Briton Cooper Busch, *Whaling Will Never Do for Me: The American Whaleman in the Nineteenth Century,* (Kentucky: The Univ. of Kentucky Press, 1994).

12 捕鯨員達の寄港地の様子について詳細に描いた書物はたくさんある。例えばMargaret Creighton, *Rite and Passages,* (New York: Cambridge Univ. Press, 1995) ; Elmo P. Hohman, *The American Whaleman,* (New Jersey: Kelley, 1972). また、当時の捕鯨や捕鯨基地を描写した作家も多い。例えば、マーク・トウェイン、エドガー・アラン・ポー、ハーマン・メルヴィルなど。

13 今日アメリカの外交を担っているのは国務省である。国務省の外交活動は、通常、在外の領事館、大使館、公使館、特別使節団などを通じて行われている。
これまでのアメリカ外交史の研究では、国務省や大使館などの役割は注目されても領事館についてはあまり分析されてこなかった。しかし実際には領事館も同様に対外関係にはかかせない機関であった。
大使よりも領事の歴史は古く、約2000年以上もさかのぼることができる。現在と類似した領事館の仕事がすでに紀元前のエジプトに存在していた。大使に任命されたほとんどの人は上級クラス、専門家、裕福な家柄の出身者である場合が多い（宮廷外交を担う）。一方領事に任命された人は、貿易商人や通商と関わりのある家柄の出身者もしくは現地で雇われた人（商人領事）である。領事は主に通商利益の拡大や自国民の救済・保護に関わり、個人の常識や勘で地域の出来事に対処していた。給料が支払われない場合もあったが、大使よりも領事は、地域に密接に関わる任務を遂行していた。19世紀を通して大使よりも領事のほうが、圧倒的に数が多く、また年々増加していた。

14 Kennedy, p 104と加藤前掲書242頁より作成。これによりアジア・太平洋において1800年代前半に領事館が急速に設置されていったことが分かる。

15日本の開国期には、東アジア・太平洋が主な捕鯨漁場となっていたので、この地域に次々と領事館が設置された。1856年、日本で最初のアメリカ総領事館の開設は、こうしたアメリカの東アジア・太平洋地域への展開過程のひとつのこまに過ぎなかった。

16当時のアメリカ領事館が設置された場所である。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

この地図から当時アメリカ領事館が設置された場所が、ヨーロッパ、西インド諸島に集中していることが分かる。アメリカの外交や貿易取引は主に大西洋地域を中心に行われていた。
一方この頃ヨーロッパ諸国は、南・東南アジアや南アメリカに貿易の拠点を置くようになっていたが、1790年代独立後まもないアメリカは、東アジア・太平洋までに勢力を展開できる時期ではなかった。しかしながら、東アジア・太平洋に領事館がなかったわけではなく、清の広州（現在の広東省）とインドのカルカッタに設置されていた。
17 このようにアメリカが東アジア・太平洋に領事館を設置する過程の中で、日本の領事館も１８56年に設置された。アメリカが東アジア・太平洋の国々と締結した条約,例えばアメリカとシャムとの通商条約や米清望厦条約などと同様、神奈川条約（日米和親条約）の中には、船員や漂流民の救助、必要物資の供給の規定や領事館の設置に関する規定がある。また、アメリカ最初の日本駐箚総領事であるタウンゼント・ハリス（Townsend Harris）は、他のアジア・太平洋地域に多数存在した領事と同様に商人出身である。ハリスは、アジア貿易から利益を得ることを推奨し積極的に日本との貿易を推進した人物であった。
18 太平洋文庫『大洋州（New Oceania）』（パシフィック・オリーブ社、1982年）92頁参照。
19 Ralph S. Kuykendall. *A History of Hawaii: Prepared under the direction of the Historical Commission of the Territory of Hawaii,* (New York: The Macmillan Company, 1928) pp49, 50
20 齋藤千春「ハワイにおける変革の時代について－カメハメハ一世の生涯からハワイ文化革命とWoman Liveの時代へ」
http://www.2.dwc.doshisha.ac.jp/agoto/sp_index.files/v3_saito_chiharu.htm　6頁
21 Captain James Cook 。1728年,10月27日にマートンインクリーブランド（Matron-in-Cleveland）のヨークショア(Yorkshire)で誕生。彼は,国王ジョージ3世(King George III)の新しい冒険、新しい科学的発見そして領土拡大という希望を叶えるために航海にでかけた。3回の航海のうちに、南太平洋の発見、南極大陸の発見、世界一周などを成し遂げている。彼は、世界中で最も偉大な航海長であり、探検家のうちの一人であるとして有名である。
22 キャプテンクックの3回目の航海の時である。3回目の航海の目的は、太平洋から大西洋へとつながる北西航路（a Northwest Passage）の発見のためのものであった。1776年7月12日に英国のプリマスを出帆し,ケープタウン(Cape Town)を経由して、ニュージーランド(New Zealand)、ソサエティ・アイランド(the Society Islands)（タヒチTahiti）諸島に繰出した。1年かけて調査をし、その後1777年12月にアメリカの北方へ向かうためにタヒチのボラボラ島(Bora Bora)を出帆した。12月24日にはクリスマス島(Christmas Island)を発見している。そしてついに、1778年1月半ばに島がある合図となるカメや鳥が見えて、1月18日にハワイ諸島の発見となったのである。
23 ハワイの伝説によると、他の外国人がハワイ諸島に到着したということである。スペインの冒険家ジュアン・ガェダー（Juan Gaetano）が1555年に発見したかもしれないということであるが、証拠はないのである。
Richard A. Wisniewski, *The Rise and Fall of the Hawaiian Kingdom: A Pictorial History,* (Honolulu: Pacific Basin Enterprises 1979) p.5
24齋藤前掲論文、7～9頁
25 1795年時に統一できたのは、ハワイ島、マウイ島、ラナイ島、モロカイ島とオアフ島であった。1810年になるとカウアイ島の王と条約を交わし、これによりハワイ王国は、ハワイ諸島を全統一したことになった。
26 当時ビャクダン（白檀）は、家具や扇子に加工生産されたのであった。
27初期の貿易は、アメリカの貿易商人とハワイ諸島の首長との間で取引された。
28 齋藤前掲論文、8頁
29 これらの数には、同じ船が重複している場合もある。太平洋で鯨が捕獲できる時期は、年に2回あった。そのため同捕鯨船が捕鯨漁場の行き帰りで4度寄港したことも考えられる。
30 ホノルルで刊行された週刊紙
31 現在のドイツ北部、ヴェーザー川下流とエルベ川下流の間にあった公国
32 Golda Pauline Moore, *Hawaii during the Whaling Era:1820-1860,* (Honolulu: The Degree of M.A. Thesis of the University of Hawaii, 1934) p.28 を参照。注として、1845年の1月に発行した『ザ・フレンド』紙には、1844年の捕鯨船は353隻であったと記されているとしている。
33 大隈清治監修『ビジュアル博物館　鯨』（同朋舎出版　1988年）には、鯨の鬚や鯨製品が鮮明に描かれている。
34 白檀の取引で1820年代にリホリホという酋長が5万ドルもするヨットを購入したと伝えられている。白檀の取引でかなりの利益があったが、白檀伐採のため、産地の山腹は、裸地になった。
太平洋文庫編前掲書、92,93頁
35 都築博子「19世紀のアメリカ捕鯨とアジア太平洋」（『大学院論集第11号』日本大学大学院国際関係研究科　2001年）157～173頁
36 ハワイ王国の歳入は主に輸入貨物に課した関税と船の所有者から得る入港税によって得ていた。『ザ・ポリネシアン』（第15巻　第38号）1859

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

年1月22日付によると、貿易から得られた利益は、1858年に、116,138.28ドルであった。

37 コロンビア・リバーは、現在のアメリカの7つの州、オレゴン、ワシントン、アイダホ、ワシントン、モンタナ、ネバダ、ワイオミ、そしてユタの州そしてカナダの259,000スクエアーマイルの流域を流れている。

38本名 Samuel Langhorne Clemens(Mark Twain) マーク・トゥエインは、1866年3月から7月まで、カリフォルニア州のサクラメント（Sacramento）の新聞『デイリーユニオン(DAIRY UNION)』のホノルル移動特派員としてハワイ諸島に滞在していた。

39 マーク・トウェィン（吉岡栄一、佐野守男、安岡真訳）『マーク・トゥェィンコレクション 15 ハワイ通信（*Letter from Hawaii*）』（彩流社 2000年）によると、「船乗りたちは出港まえに、いつもあり金をぜんぶ使いはたしてしまう。昨年、彼らがここに落とした金は十五万ドルであり、今年の船団が戻ってくれば、紛れもなく二倍の金を使ってくれることであろう。十五年か二十年まえの最盛期には、大漁のあとにここの港に入港し、百五十万ドルもの大金を惜しげもなく使ってくれたものである。当時、捕鯨船の大船団はここで、一年間分の艤装や食料補給や乗務員の募集も行っていた。捕鯨からあがる利益は、鯨油や鯨骨の長期にわたる高値に刺激されて、いまや着実に伸びつづけ、・・・かつての捕鯨業の全盛時代には・・・そのうち三分の二はここの市場で補給したため、・・・ホノルルは百万ドル以上のもうけとなった。」とある。

40 例えば、1852年の暴動である。バーンズという捕鯨船員が酔っ払いって同僚と一緒に留置所に拘留された。彼らが留置所でも騒いだので巡察官が、バーンズの頭を棒でたたいたであった。バーンズは、その2,3時間後に亡くなった。その抗議のために船員達の大群が酔っ払いながら、手に棒をもって町じゅうを歩いた。そして警官を追い出し、家具を破壊し、火を放った。その家は全焼した。夜になるとまた船員達は、町中を荒らした。このような暴動は捕鯨時代にいつも起っていたのであっと言われている。
国友忠夫訳『ハワイ史』（三省堂 1943年）213,214頁、Mrantz, Maxine. *Whaling Days in old Hawaii.* (Honolulu: Aloha Graphics and Sales, 1976) pp28-31などを参照。

41ハワイの先住民達は、捕鯨船上での仕事がどのようなものか知っていたとしても、彼らはその仕事に従事した。捕鯨船長は勤勉なハワイの先住民を喜んで雇った。先住民が他国に移住してしまって二度とハワイ諸島に帰ってこない場合もあった。ハワイを去ってしまったハワイ人の数を把握する事は不可能である。しかし正式な発表によると、1845年651人、1846年534人、1847年659人であるとしている。また、1846年の内務大臣の発表を引用し、絶えず太平洋を航行しているハワイ人は、3000人をくだり、30歳から50歳までの男子の5分の1が太平洋内にいるかハワイ諸島以外にいる。（国友前掲書、217,218頁参照）
働き盛りの男性がハワイで不足となった。そのことがハワイにおいて深刻な問題になった。それを対処するために、ハワイ王国は法律を発した。最初に船長がハワイ人を雇う際には、その島の知事から許可を得ること。次に保証金を置いていくこと。そしてその住民を2年以内に帰島させること、であった。しかし実際は守られない場合が多かった。

42 ハワイにおける労働力を、反対にハワイに定住した外国の捕鯨船員などが担っていた場合もあった。

43 John Coffin Jones。彼はハワイ諸島を何度も訪れている貿易商人で、ハワイやハワイ語を熟知していた。

44 領事について詳細に書かれた文献は、Charles Stuart Kennedy, *The American Consul: A History of the United States Consular Service, 1776-1914,* (Westport, Greenwood, 1990)がある。

45 領事はおもに通商利益の拡大や自国民の救済・保護の関わり、地域の出来事に臨機応変に対処していたのであった。

46 国友前掲書,140,141頁

47 Articles of arrangement signed at Honolulu December 23, 1826 Entered into force December 23, 1826
Articles of arrangement made and concluded at Oahu between Thomas ap Catesby Jones appointed by the United States, of the one part, and Kauikeaoui, King of the Sandwich Islands, and his Guardians, on the other part.
http://www.hawaii-nation.org/treaty1826.html

48 1844年の5月の『ザ・フレンド』紙によると、船で運搬するのにニューヨークからホノルルまで146日間、ボストンからホノルルまで153日間、かかるとしている。カリフォルニアからホノルルまでは、平均20日間であり、アメリカの東海岸から比べると西海岸からのが126日間から133日間も早くハワイ諸島につくことができるようになった。

49 国友前掲書、204頁

50 Treaty signed at Washington December 20, 1849...Entered into force August 24,1850
The United States of America and His Majesty the King of the Hawaiian Islands ... have agreed to enter into negotiations for the conclusion of a treaty of Friendship, Commerce and Navigation, ...
http://www.hawaii-nation.org/treaty1849.html

NII-Electronic Library Service